

令和4年度から大分大学と連携し、「OJTに係る調査・研究及び各学校への情報発信」をテーマに、調査結果に基づいた協議と効果的なOJTについての情報発信を行っている。令和5年度は、教員個々の成長に係る「日常のOJTの取組」と、組織としての成長に係る「校内研究等におけるOJT」の二つを柱に調査研究を行った。

日常のOJTの取組

「基礎形成期」における日常のOJTの実態
～初任者研修、2年目研修、3年目研修対象者アンケートから～

【取組内容】

○初任者研修、2年目研修、3年目研修対象者アンケートの実施と分析

Google フォームにて、研修実施日に以下の項目についてのアンケートを実施した。

(1) 採用されてからこれまで、自分が経験した困難や課題について

(2) 困難や課題を乗り越えるための支えや助けになったもの

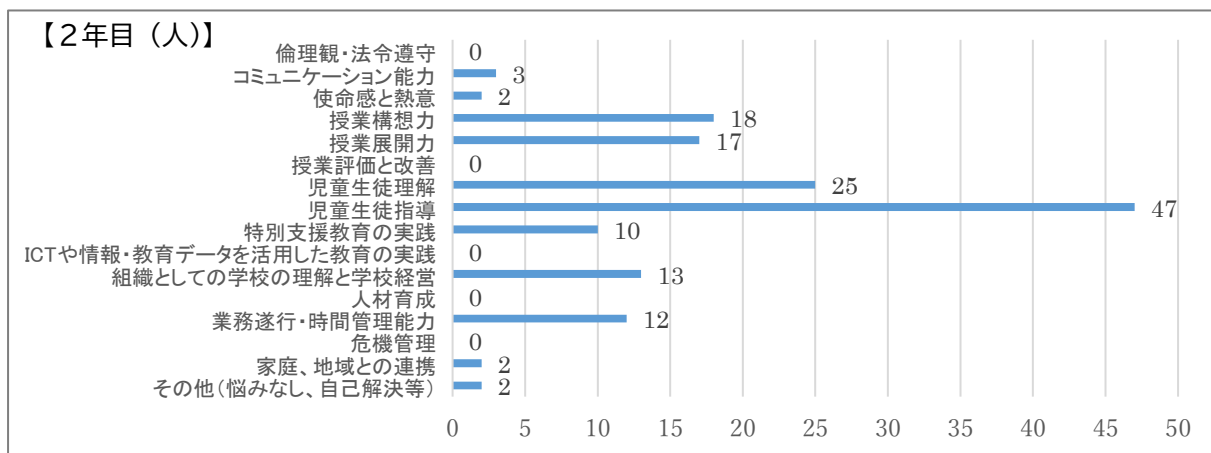
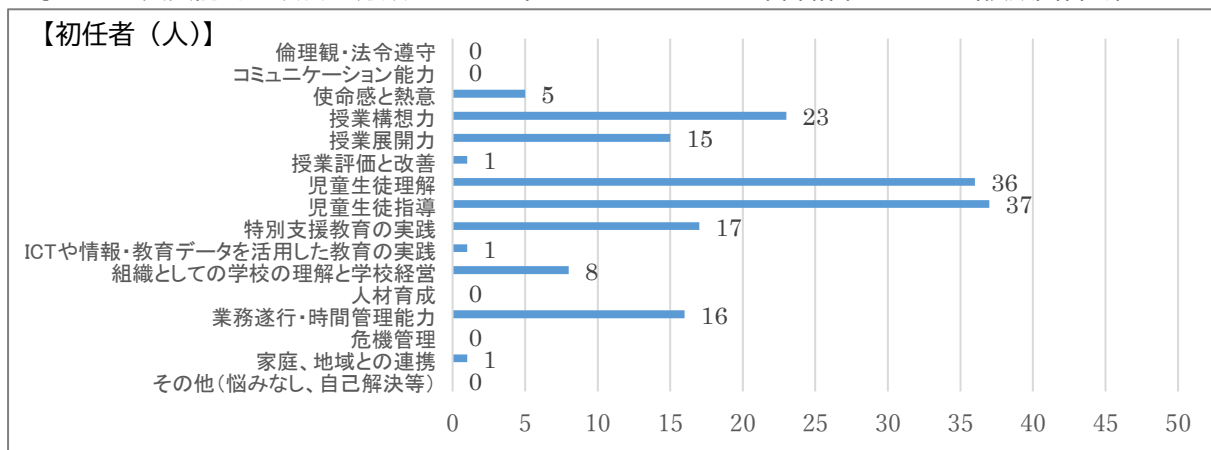
先輩や同僚のうち、誰から、いつ、どのようなものだったか

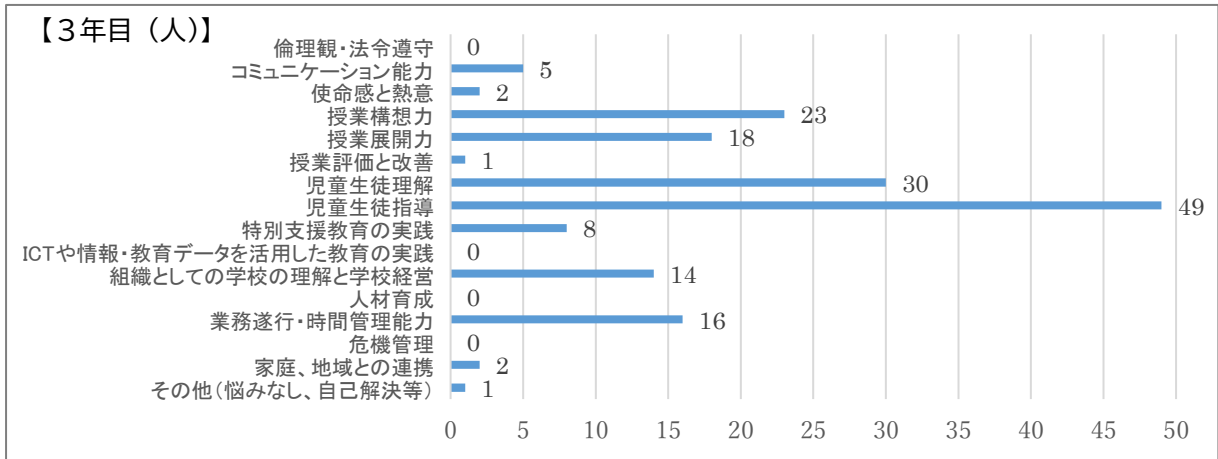
<実施日>初任者9/14、2年目7/27、3年目8/21

<回答数>初任者97人(小75、中22)、2年目91人(小67、中24)、
3年目104人(小70、中34)

(1) 自分が経験した困難や課題について

アンケートによって見いだされた困難や課題を、「大分県公立学校教員育成指標（教諭等）」に示される資質能力の項目で分類した。以下のグラフは、その集計結果である。（複数回答可）





【考察】

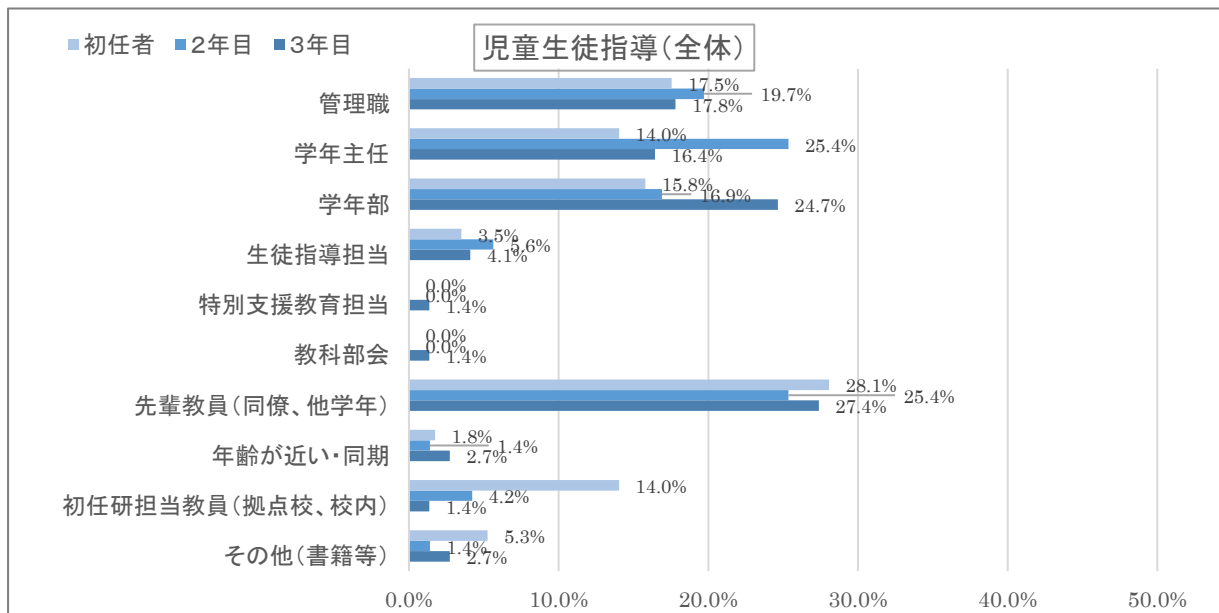
三者とも、回答数の多い順に「児童生徒指導」、「児童生徒理解」、「授業構想力」であった。初任者は「児童生徒理解」と「児童生徒指導」がほぼ同数であり、「児童生徒理解」については、「子どもとの関わり方」「学級の雰囲気づくり」「子ども一人一人のつまずきや実態の把握」「聞く姿勢などの学習規律の徹底」などが主な悩みであった。初任者研修に係る校外研修では、「児童生徒理解の力を高める17項目」についての協議を位置付けているが、今後は「学級経営」についての研修内容の充実を図る必要があると考える。

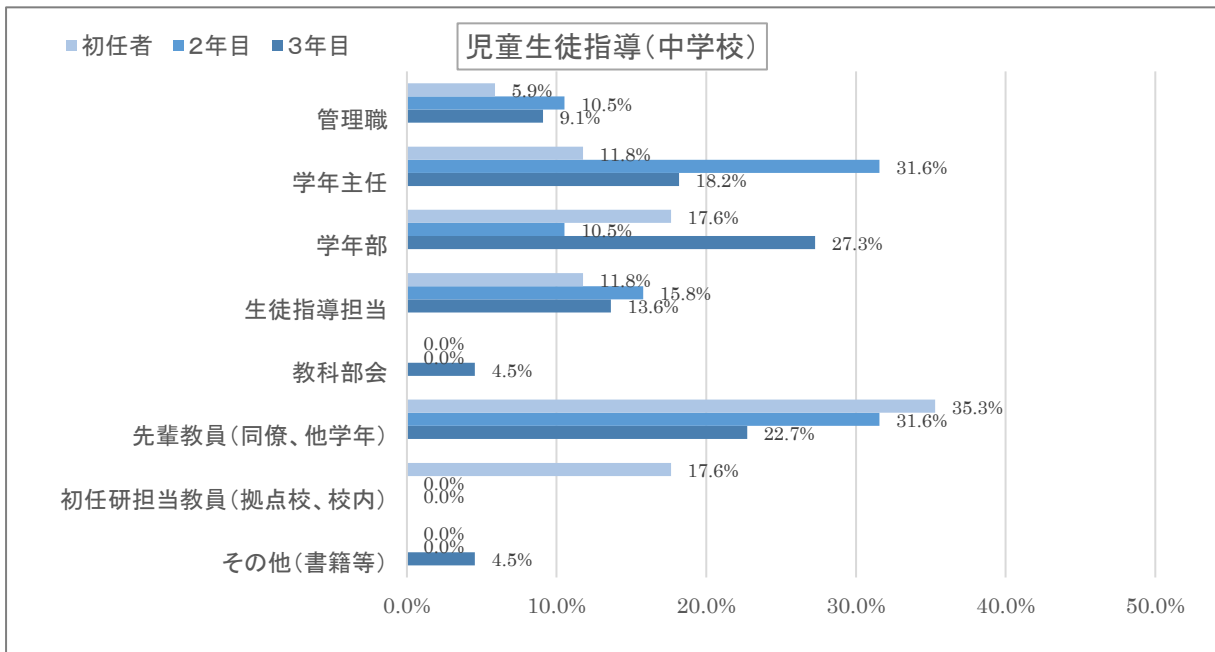
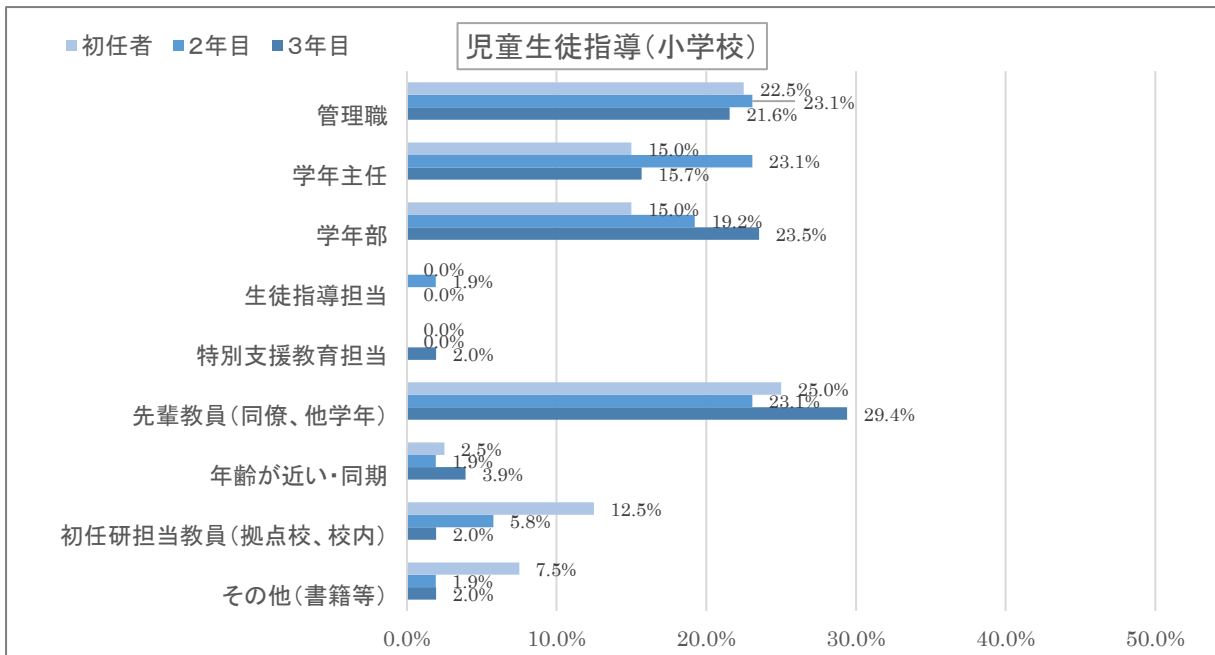
また、2年目、3年目になると「児童生徒指導」が突出している。「児童生徒間のトラブルの解決」「保護者対応」が主な悩みであり、これらの対応に追われ、授業に支障をきたす、時間が足りないなどの課題にもつながっていると考える。

(2) 困難や課題を乗り越えるための支えや助けになったものについて

三者で回答数が多かった「児童生徒指導」、「児童生徒理解」、「授業構想力」について、誰からの助言等によって乗り越えることができたかを、全体、校種別にまとめた。(複数回答可)

① 児童生徒指導





【受講者アンケートから】

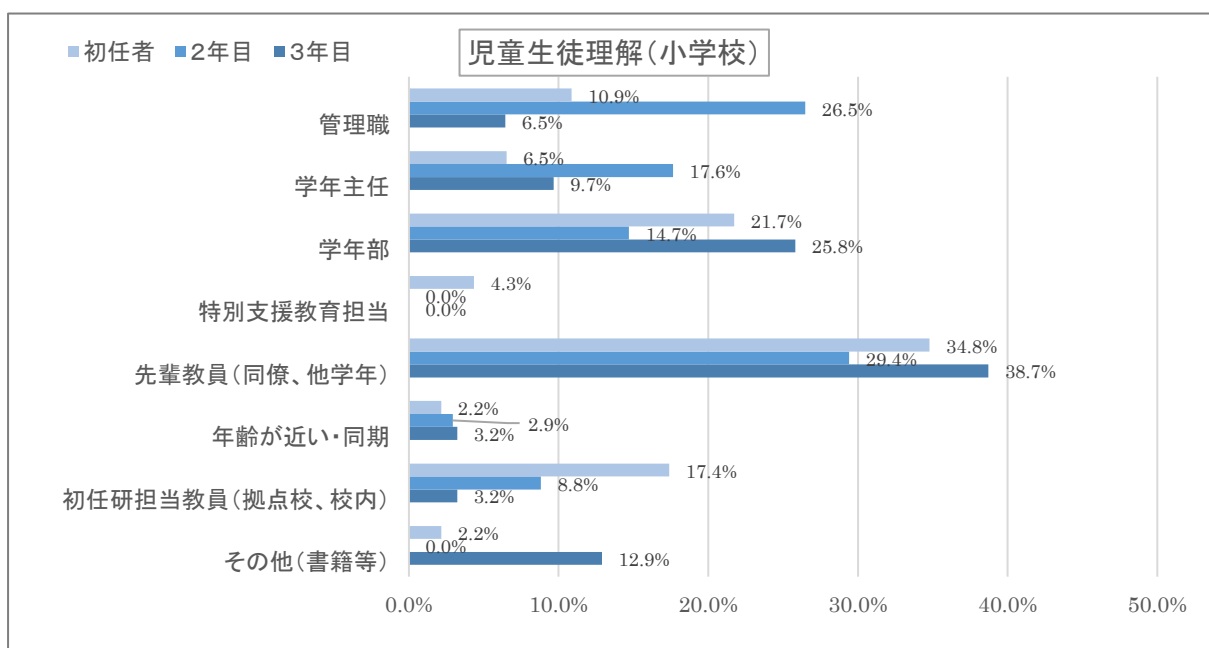
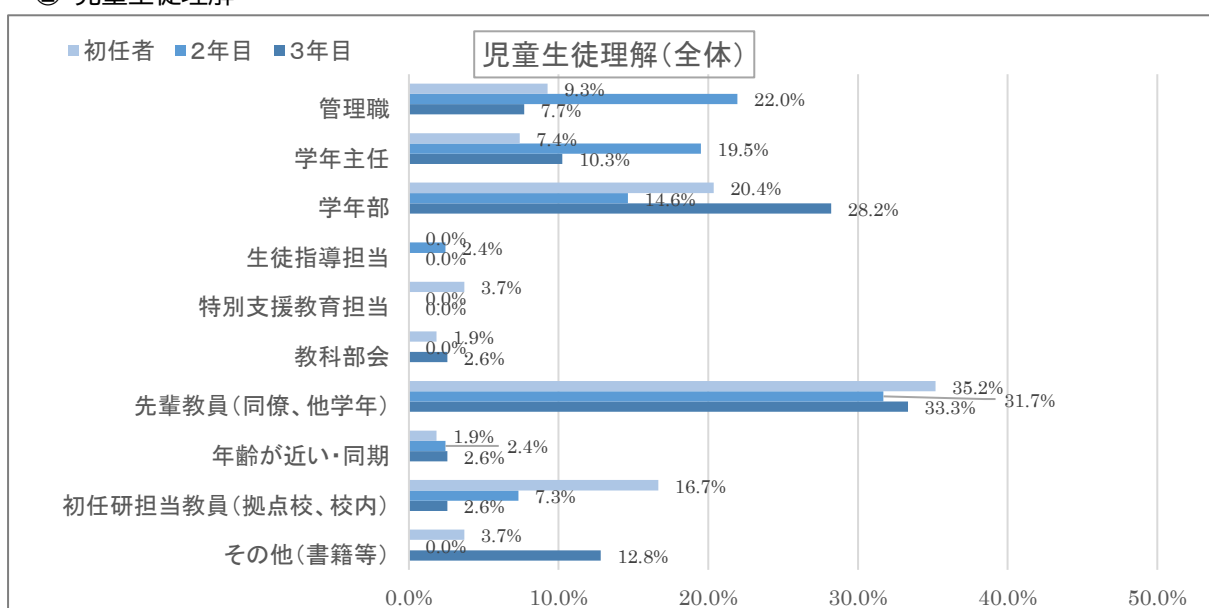
- 管理職や学年部の先生にどのように対応すべきか事前に相談し、何かあったときは随時報告をして一緒に対応していただいた。(初任者<小学校>)
- 校長を中心に対策チームを構築し、話し合いを重ねた結果、校長から直接保護者への連絡をしていただいた。(初任者<小学校>)
- 学年主任が、一緒に生徒指導に入ってくれたり、放課後の保護者対応が終わるまで待ってくれたりした。(2年目<小学校>)
- 生徒への事情の聴き方、保護者への答え方など、問題が起きたときはもちろんだが、日ごろからたくさんアドバイスを学年部の先生からもらっている。(2年目<中学校>)

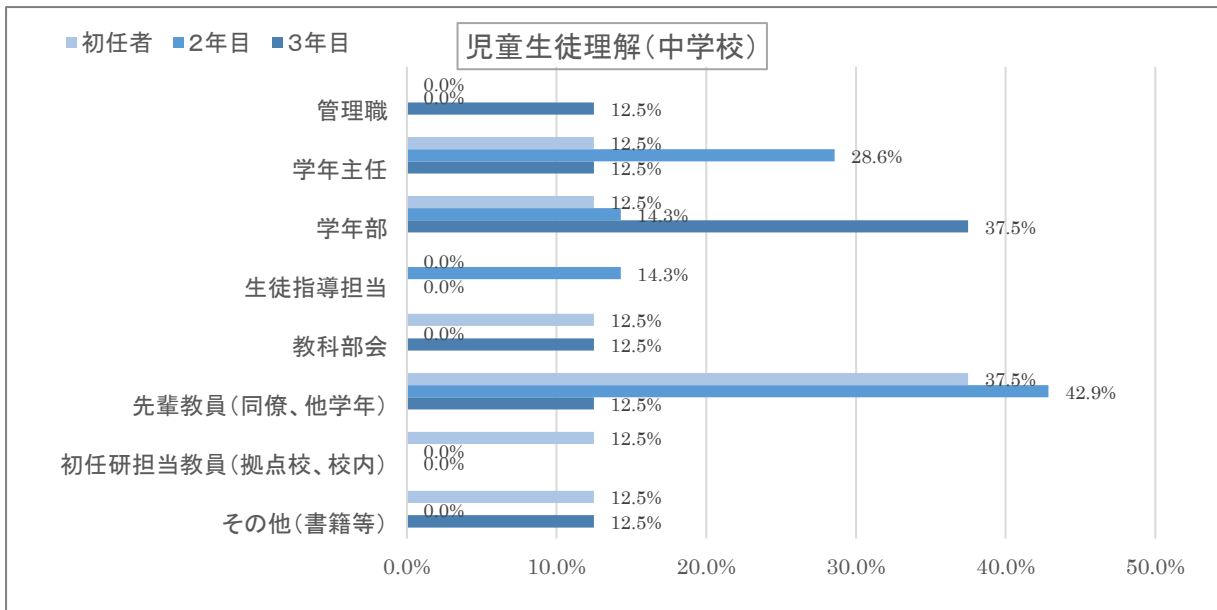
【考察】

「大分県公立学校教員育成指標（教諭等）」に示される資質能力「児童生徒指導」の基礎形成期終了までの目標の姿は、「保護者や校内組織と連携して、個に応じた指導ができる」ことである。

小学校と中学校を比較すると、小学校は三者とも「管理職」が高い。【受講者アンケートから】の二つ目の記述にもあるように、管理職を中心としたチームで生徒指導に当たっていることが要因の一つであると考えられる。一方、中学校では、「生徒指導担当」や「学年主任」が高くなっている。生徒の問題行動への対応や保護者対応などは、学年部の生徒指導担当や学年主任を中心としたチームで対応しているからであると考えられる。また、小学校、中学校とも初任者については「初任研担当教員」が高くなっている。初任者にとって、拠点校指導教員等の初任研担当教員との日常のコミュニケーションは欠かせないものであり、初任研担当教員に困りや悩みを相談できるほど、初任者と初任研担当教員との関係が良好であることが推察できる。なお、どちらも「先輩教員」が高いが、学年部や学年部を超えた同僚教員を含むことからこのような結果が得られたと考える。

② 児童生徒理解





【受講者アンケートから】

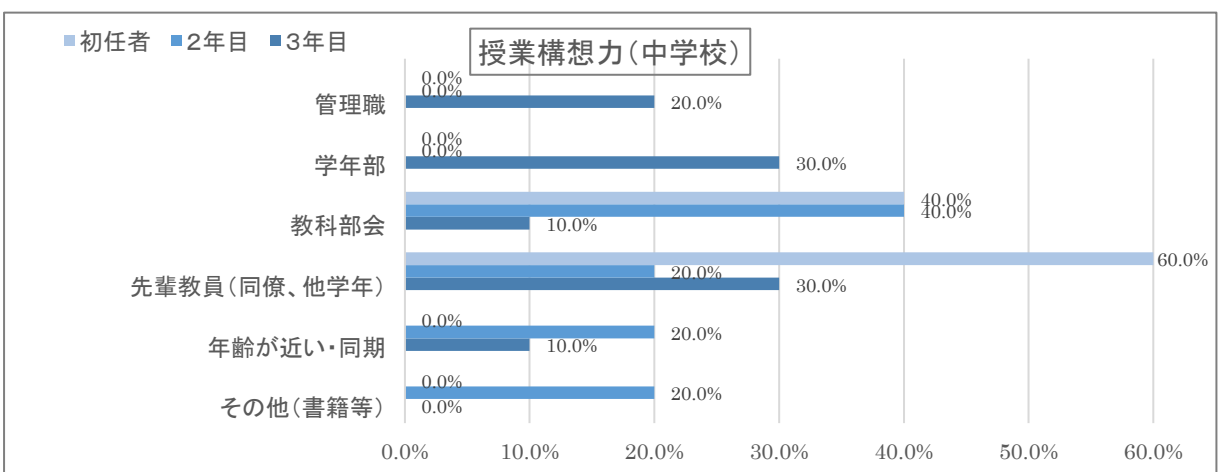
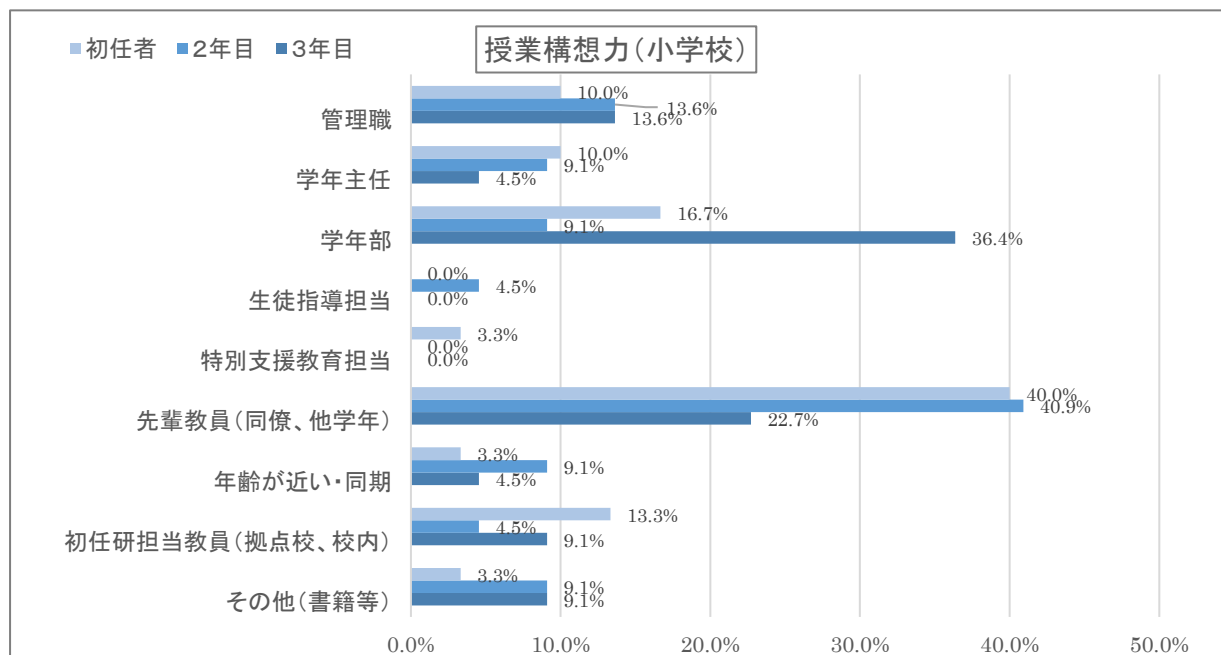
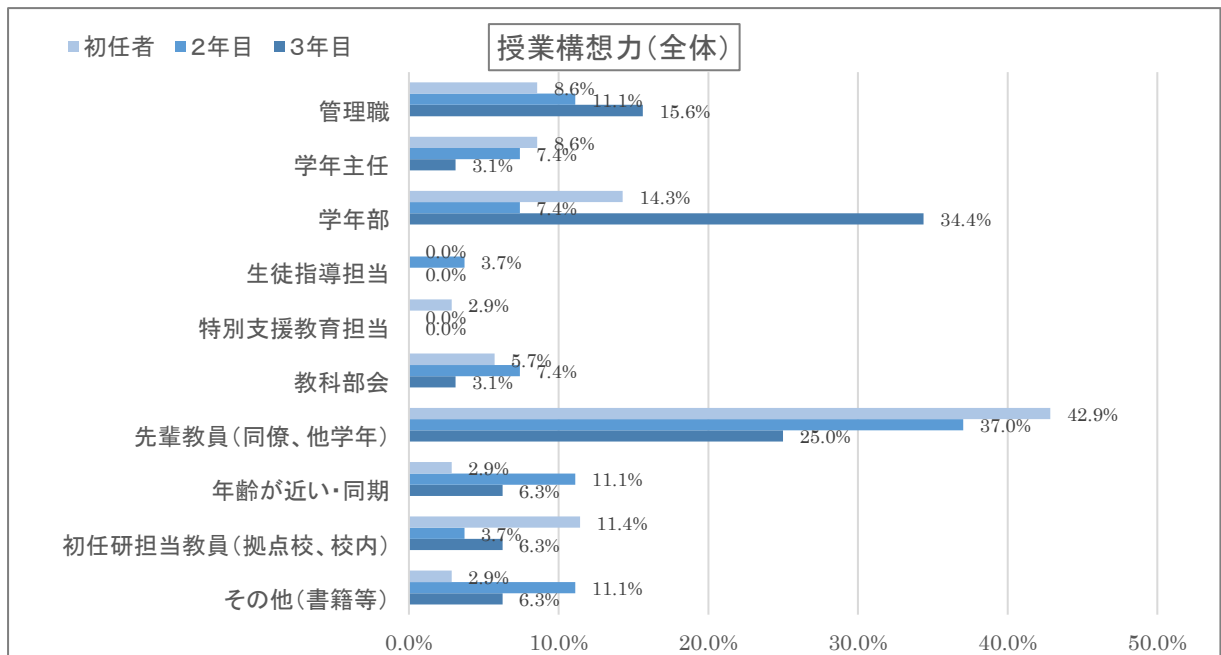
- 先輩の先生や拠点校指導教員から、保護者への連絡は「小さなことでも何かあったらすぐに連絡するとよい」と助言をいただいた。(初任者<中学校>)
- 高学年部の先輩が、「人間関係づくりプログラム」の方法や学級経営で必要なことを教えてくれた。また、具体的な取組だけでなく、思い悩まないように励ましの言葉等をくれた。(2年目<小学校>)
- 管理職や学年主任に相談して、学校が不安な子どもへの対応について教えてもらったり、子どもの日頃の様子をよく見て声を掛けたりすることの大切さを学んだ。(3年目<小学校>)
- 学年主任から冷静で的確なアドバイスをいただいた。自分の年齢ではもっていなかった考え方であった。(3年目<小学校>)

【考察】

「大分県公立学校教員育成指標(教諭等)」に示される資質能力「児童生徒理解」の基礎形成期終了までの目標の姿は、「学級の児童生徒を取り巻く環境や多様な個性を理解し、児童生徒一人一人に向き合うことができる」ことである。

全体、小学校、中学校の「学年主任」を見ると、2年目が最も高い。学年主任は、学年の児童生徒を取り巻く環境や児童生徒一人一人の個性について理解しており、2年目にとって身近な相談相手であることが分かる。また、初任者の「学年主任」と「初任研担当教員」を比較すると、中学校は12.5%と同値であるが、全体、小学校の「初任研担当教員」は「学年主任」の2倍以上となっている。初任者の指導を行う拠点校指導教員は、校内研修日には終日学級で過ごすことから児童一人一人の個性を理解している。このことから、初任者は、拠点校指導教員に相談しやすい状況となっていると考える。3年目については、全体、小学校では「先輩教員」「学年部」が高くなっているが、中学校では、「学年部」が突出している。中学校では、1年から2年、3年と学年を持ち上がり、進路指導等を含め学級担任同士で情報交換することが多いことから、「児童生徒理解」については、学年主任ではなく学年部に相談していると考えられる。

③ 授業構想力



【受講者アンケートから】

- 学年主任にどのように授業を進めているか聞いて参考にしたり、拠点校指導教員のご指導をいただいてどのような流れで授業を進めるとよかったか振り返ったりすることにより、次の授業に生かすことができた。(初任者<小学校>)
- 先輩の先生が授業の流れやワークシートを見せてくれたり、教科指導マイスターが指導案や授業の参考になる資料等を提示してくれたりした。(初任者<中学校>)
- 校内研修や学年部における協議、拠点校指導教員からいただいたアドバイスや授業実践で学びが深まり、自分だったらこうしてみたいというアイデアも生まれた。(2年目<小学校>)
- 学年部の先生から自校を超えた学習会等を紹介してもらった。全国の先生たちから授業の進め方について助言や励ましをいただいた。(3年目<小学校>)
- 先輩自身がこれまで指導されてきて勉強になった教材研究や実践して効果があったものを共有してもらった。(3年目<小学校>)
- 中教研の同じ部会の先生からのアドバイスや同僚の先生の考え方を聞いて参考にしている。(3年目<中学校>)

【考察】

「大分県公立学校教員育成指標（教諭等）」に示される資質能力「授業構想力」の基礎形成期終了までの目標の姿は、「学習指導要領に基づき、育成を目指す資質能力を明確にした授業の指導計画を適切に実施できる」ことである。

全体の「管理職」を見ると、初任者、2年目、3年目と経験を重ねるにつれ増加している。これは、2年目、3年目になると校内研究や小教研、中教研などの提案授業者になることが多く、学習指導案について管理職から助言を受けているからであると考えられる。管理職が日常的に教室を巡回し、児童生徒の状況を把握したり、授業者に助言したりしていることから、管理職への相談がしやすい状況を生み出していると推察できる。また、小学校では、「学年部」「先輩教員」が高くなっている。学級担任が複数の教科を指導することから、学年部や教科指導に優れた先輩教員などに相談していると考えられる。中学校を見ると、初任者、2年目の「教科部会」が高い。所属学年以外の学年の授業を担当することもあることから、担当学年の教科担当教員とのコミュニケーションは欠かせない。定期に実施する教科部会をはじめ、同教科の教員に相談しやすい環境であることが分かる。

(3) 全体を通して

アンケートから分かった顕著な困難や悩みを「大分県公立学校教員育成指標（教諭等）」に示された資質能力等に照らし合わせてみると、「学習指導と評価の力」「児童生徒指導と集団づくりの力」に該当し、「教職としての素養」「教職の実践」の二つの資質能力の視点のうち、「教職の実践」に関するものであった。

「学習指導と評価の力」については、初任者にとっては、先輩教員、学年部、初任研担当教員による支援体制の影響が大きいと考える。校外研修において、2年目研修では「授業力」をテーマに授業研究等を行っていること、3年目研修では「学校組織の活性化に寄与する力」の育成を目指した教育実践に係る研修を実施していることから、管理職による助言が多くなっていると考えられる。

「児童生徒指導と集団づくりの力」については、先輩教員に次いで、管理職や学年主任、学年部による支援が行われている。これは、問題行動や保護者対応等への組織的な対応が求められていることからであると考えられる。

また、2年目、3年目と経験を重ねるにつれ、学習指導や生徒指導、分掌などにおいて重要な役割を担う教員が増えていることにより、「業務遂行・時間管理能力」に困難や悩みを抱えていることが分かる。今後、2年目研修、3年目研修において、「大分県公立学校教員育成指標」に示された資質能力のうち、「組織としての学校の理解と学校経営」について触れるとともに、学校組織の一員としての意識の醸成を図る必要があると考える。